



南葵音楽文庫ミニレクチャー

指揮者ヘンリー・ウッド Sir Joseph Henry Wood

—— 頼貞がロンドンで教えてもらったこと ——

南葵音楽文庫

和歌山県立図書館内

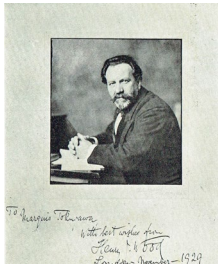
和歌山市西高松 1-7-38

tel.073-436-9500

林 淑 姫

2019年5月18日(土) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)



【大戦後のロンドンとサー・ヘンリー・ウッド】

私はサー・ヘンリーに、東京に建てた私の南葵楽堂にそなえつけた英国製のパイプオルガンのピッチについて話したところ、ウッドはロンドンでも数年前までは大抵のオルガンはコンサート・ピッチであったが、それでは不便があるので、音楽会場のものは、今日では、ほとんどインターナショナル・ピッチにかえたと説明してくれた。英国では田舎へ行くとまだまだコンサート・ピッチのオルガンが多い。これをインターナショナル・ピッチに変えることはできなくはないが、それにはほとんど新しく設置するほどの費用を要するという話であったから、私は南葵楽堂のオルガンのピッチを変更することを断念した。

話が南葵楽堂で演奏されたオーケストラのことに移ると、それ等のオーケストラはいくつのコントラバスを持っていたかとたずねられた。私ははなはだ恥しいが四個位だと答えた。すると彼の曰く、シンフォニーを演奏するには管絃楽は最少六個のコントラバスがなければならない(私がローマのアウグステオ楽堂で聴いたニキシユ指揮でのオーケストラには十六個のバスを持っていた)、それだけはぜひ必要であるとのことであった。私は二個のバスを備えようと考え、コントラバスを購入したいから適当の楽器店を教示されたいと依頼した。(略)

『頼貞随想』徳川頼貞遺稿刊行会編 河出書房、1966)

(左下のポートレートは1929年にウッドより頼貞に贈られたもの)

ヘンリー・ウッド

Sir Henry Joseph Wood

1869~1944

ロンドン生まれ。敬虔で音楽好きの家庭に育つ。アマチュアの演奏家でもあった両親のもとで幼い頃よりヴァイオリン、ピアノ、オルガンを学び、14歳でオルガン・リサイタルを開いた。1886年、王立音楽アカデミー(Royal Academy of Music)に入学。ピアノ、オルガンに加えて作曲を学ぶ。卒業後サヴォイ・オペラに招かれてギルバート&サリヴァンのオペレッタ、つづいてカールー・ローザ歌劇団の常任指揮者として、チャイコフスキー「エヴゲニー・オネーギン」の英国初演などを行う。1895年8月にクイーンズ・ホール企画による夏の音楽祭「プロムナード・コンサート」(今日のBBCプロムス)が開始され、指揮者に就任、終生その任にあった、2つの大戦下の困難な時期にもコンサートを中断することなく開催、プロムナード・コンサートの維持、発展に努めた。

ロマン派の名曲をレパートリーとする一方、同時代の作品の紹介にも積極的にかかわり、ヴォーン・ウィリアムズをはじめとする同国人作品はもちろん、ドビュッシーやR.シュトラウス、マーラーなどヨーロッパ大陸の作品の英国初演、ときには界初演も多く手がけた。シェーンベルク「5つの管絃楽曲」(1909)、スクリャービン「交響曲第5番<プロメテ>」(1910)の世界初演は彼とクイーンズ・オーケストラによるものである(1912、1913)。ウッドが私淑していた指揮者はニキシユで、髭のたくわえ方も真似していたらしい。当時英国で一般的であった楽器のピッチをヨーロッパ基準に変更することを主張していたことでも有名。英国オーケストラの水準向上と聴衆の音楽趣味の拡大、深化に生涯その努力を傾けた。